

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

お命ちょうだい

【作者名】

梨乃

【あらすじ】

幽霊嫌いの女子中学生が、幽霊と出会い、幽霊のすべてを知っていく物語。

幽霊遭遇

ある平凡でありきたりの学校で、3人組の女子中学生が話している。

中学生が好きそうな、お化け話だ。

「ねえ、本当にいるの？そんな幽霊。」

「こわこわ聞いてきたのは桜木 葵。お化け嫌いで有名な髪の毛の長い女の子。」

「いるよ。友達が見たって言った。」

うれしそうに語るのは、葵とは対照的に幽霊好きな姫路 神奈。肩まで髪のある女の子。

「ねえ、見に行かない？」

肝試しを提案するのは、中村 麻里。怖がりだけど、幽霊物が好きな不思議な子。

「ええ〜やめようよ。」

「だって見てみたくない!?井戸から女性が出てくるんでしょ？」

「いかにも幽霊っぽいじゃん!!」

「ね、行こうよ!!神奈!」

「……いいわね、行きましょつ。」

「よし。これで二対一。決定ね。」

「ええ〜〜〜」

葵はその場に座り込んだ。

その夜

学校で集まった三人は、荒地へと向かった。

雑草は伸び放題の荒地の真ん中に、現代では時代遅れな井戸がある。

いかにも使われていなさそうな井戸だ。

「ねえ……やっぱり帰ろつ……」

「何言ってるのよ、葵！ここまで来ておいて。」

「ええ〜だつて……」

その時、周りでカラスの鳴き声がした。

「ひい〜〜〜〜〜」

三人は震え上がった。

井戸の底が光り出した。三人は声が出せなくなる。

光り出した井戸から、髪の毛の長い、女の人が、ナイフを手に、浮かんで来た。

女の方は顔を髪で隠していた。

ナイフを構え、明るい声で言った。

「お命ちょうだい!!」

その一言で、三人は逃げ出した。

しかし、葵だけが伸びすぎた雑草に足を取られ、動けなくなる。

しかし、神奈と麻里は気が付かずに逃げ出してしまふ。

「あ、ちょっと・・・」

葵は怖さのあまり、叫ぶ声も出てこなくなる。

女の幽霊が、襲いかかってきた。

葵は、きつく目を閉じた。

幽霊親友

取り残された葵は、深く目をつぶった。

一瞬、死を覚悟したが、全く痛みは来なかった。

恐る恐る目を開けると、幽霊が葵の一步手前で止まっていた。

幽霊はえいっ！えいっ！と勢いをつけて葵に襲いかかるうとするが、なぜかそれ以上は動かない。

そのまま逃げればよいものを、葵は声をかけてしまった。

「……何してるの？」

驚いたことに、幽霊は普通に答えてくれた。

「これ以上井戸から離れられないのよ。もうっ！」

幽霊の顔は髪で隠されていたが、その声は女の子の声そのものだった。

「……女の子？」

「あ〜もういいや。」

葵は、その幽霊に妙な親近感を持った。

「ねえ、何で襲いかかってきたの？」

「ん？」

「だって、なんか妙に怖くないっていつか。」

「だったらさつきは何で逃げたのよ!!おかげで届かないじゃない。」

「だって驚いたし・・・届いたら私殺されちゃうし。」

「殺しはしないわよ。魂をもらうだけ。」

「そっちの方がひどい気がするんだけど。」

「気のせい、気のせい。」

子供っぽい幽霊にあっけにとられていた葵は、たまらず吹き出した。

つられて、幽霊も笑い出す。

「ねえ。名前は？」

幽霊が問いかけてくる。

「私は葵。あなたは？」

「私に名前なんてないわよ。ただの幽霊だもん。」

「まあ、いつか。ねえ幽霊さん、何で襲いかかってきたの？」

「早くこの井戸から出て成仏したいのよ。」

「成仏できないの？」

「私、幽霊になる前のこと、全く覚えてないんだけど……ただ、感覚で誰かと入れ替われば、この井戸の呪縛から解き放たれるってわかってるのよ。」

「だから入れ替わろうとしたの。」

「そうよ。だって、もう何年もここに居るのよ。井戸からあまり離れられないのに、人間はすぐ逃げちゃうし。……ねえ、私と替わってくれない？」

「嫌よ。幽霊になんかなりたくないもん。」

「ただの幽霊じゃないわよ。呪縛霊。」

「余計嫌よ。」

幽霊と葵は、再び吹き出した。

「なんか、幽霊さんとは初めて会った気がしないね。」

「私も。」

「ねえ、明日も会いに来ていい？」

「え？入れ替わってくれるの？」

「それはいや。でも、暇つぶしの相手ぐらいならできるよ。」

「いいの？やった〜!!」

幽霊は目を輝かせて喜ぶ。

その日は、そこで別れた。